様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年　6 月　3 日現在

機関番号：64401
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2010 年度～2012 年度
課題番号：22720338
研究課題名（和文）　オセアニアの紛争に関する文化人類学的研究:フィジー諸島共和国の事例から
研究課題名（英文）　Cultural Anthropological Studies of Conflicts in Oceania focusing on the case of Fiji Island

研究代表者
丹羽　典生（NIWA NORIO）
国立民族学博物館・研究戦略センター・准教授
研究者番号：60510146

研究成果の概要（和文）：本研究は、近年増大している第三世界の紛争の特質の一端を、オセアニアのフィジー諸島共和国を事例に解明することを目的とした。成果としては、フィジーの紛争時の特質としての分裂主義的な傾向について、西部地方の事例から明らかにした。また、オセアニアにおける独立以降の政治的問題について解き明かす編著を出版した。

研究成果の概要（英文）：the aim of this research project is to shed some light on the characteristics of the conflicts in the current third world by focusing on the case of Fiji islands. As a result of the project, I can make clear that separating elements tend to emerge during the political upheaval from the case study of separationist movements in the western Vitilevu, Fiji. As a part of the research project, the book on the current political situation of Oceania was published in 2013.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2012 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総　計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：文化人類学・民俗学
科研費の分科・細目：文化人類学 文化人類学・民俗学
キーワード：紛争、オセアニア、フィジー、比較政治

１．研究開始当初の背景

冷戦以降の第三世界における民族紛争の増加や、低強度紛争という新たな戦争形態の出現という近年の変化と、応用研究に対する関心の高まりと相即して、広い意味での紛争に関する人類学的研究は、増加傾向で、人間の安全保障、平和構築など紛争に関する新たな視点からの事例分析がなされている。

本研究が事例として主たる対象としているオセアニアのフィジー諸島共和国は、(1) イギリスの植民地政策の遺産として総人口の約半数を移民の末裔であるインド人が占め、その他にソロモン諸島民、ロトゥマ人などの少数民族が存在するという複雑な民族構成であること。(2) なかでも先住系フィジー人（以下、先住系はフィジー人と表記）の経済発展の遅れという 2 点が背景要因となることで、インド人主体の政権が成立した後の 1987 年、2000 年にフィジー人を主導とするクーデタが起きた。2006 年には、逆にこう

したフィジー人民族主義的に反発するフィジー人がクーデタを起こすなど、政治的に不安定な、いわば紛争の絶えないオセアニア島嶼国家の代表的な存在となっている。

これまで申請者は、先住民の開発と社会運動の問題について研究を行ってきた。開発や社会運動を近代化の問題と絡めて議論を進めるなかでクーデタと政治的不安定性に関する十全な解明を抜きにして、フィジーの近現代は理解できないことを認識させられた。また、申請者自身、フィジーにおける調査を2000 年のクーデタ直後に始めるという機会を得たこともあり、紛争が巻き起こす社会の変化については深甚な関心を抱いてきた。若干の研究は既に発表しており、先行研究においてクーデタの発生原因にしばしば帰せられてきた民族、階級という要因の有効性と限界について考察している。

２．研究の目的

本研究は、近年増大している第三世界の紛争の特質の一端を、オセアニアのフィジー諸島共和国を事例に解明することを目的としている。オセアニアにおいては、植民地時代の政治闘争以降の政治的に安定した時期を経て独立をはさみ、1990 年代後半以降、暴動から民族紛争、クーデタまでさまざまな政治的問題が起きている。本研究では、人間の安全保障、平和構築など紛争に関する新たな視点からの理論構築や事例分析を踏まえた上で、人類学的なミクロな視点からの分析を活用しながら、紛争に関する文化人類学的考察を行う。最終的には、比較の視点からオセアニアの紛争の特質を明らかにし、さらには学際的な紛争研究へと昇華させる。

３．研究の方法

本研究は、人類学においても近年盛んになりつつある先行研究の批判的読解を踏まえた上で、人類学的現地調査とオセアニアの政治学者・NGO 関係者への聞き取りを統合して行う。フィジーの紛争研究は盛んであるが、村落調査を踏まえた成果は数えるほどしかない。そこで、本研究では、民族構成とクーデタに対する態度に顕著な違いがある村落への住み込み調査と、研究者・NGO 関係者への聞き取りを幅広く行うことで、フィジー人の紛争観を解明する。さらに、オセアニア各地の主要な現地人政治学者への聞き取りと、彼らとの情報交換や議論を通じて、フィジーの紛争の特質をオセアニア諸国との比較のなかで明らかにする。研究期間は 3 年とし、順次、歴史研究、現地調査、研究者との情報交換を遂行していく。前半は現地調査を中心的に行い、後半、成果の取り纏めと議論の精緻化を図るため、研究者への聞き取りを中心に行うという方法で行う。

４．研究成果

研究成果としては、以下の文献調査、現地調査を遂行することができ、それを踏まえて、編著 1 冊、論文７件、学会発表を 16 件のほか、12 件程度の短い文章を発表した。

テーマと関連させて、2009 年度より国立民族学博物館・共同研究会（『オセアニアにおける独立期以降の＜紛争＞に関する比較民族誌的研究』）を、遂行しており、2012 年度に完了させた。

さらに、本研究テーマを発展させて、国内のシンポジウム 1 件（『現代の紛争をめぐる地域間比較研究に向けて――アフリカとオセアニアの事例から考える』地域研究コンソーシアム）、国際シンポジウム２件（『グローバル化における紛争と宗教的社会運動――オセアニアにおける共生の技法』、『Identifying New Topics in Fijian Studies』）を行った。

１）文献調査及び研究ネットワークの構築

イギリスの国立公文書館、フィジーの国立古文書館、南太平洋大学パシフィック・コレクション及び、オーストラリア・ミッチェル図書館、古文書館（在シドニー）、に所蔵が確認されているフィジー関係資料の調査を遂行した。

研究ネットワークの構築と研究成果の交際的な発信のために、ドイツのフロベニウス研究所、オランダのアムステルダム大学、フィンランドのヘルシンキ大学にて、オセアニア及び紛争関係の研究者と情報交換と将来的な共同研究のための打ち合わせを行った。この点は、国際シンポジウム（『グローバル化における紛争と宗教的社会運動――オセアニアにおける共生の技法』）の形で、生かすことができた。

２）現地調査

フィジーの村落部を中心に現地調査を行った。本研究の調査・成果公開を通じて得られた具体的な知見としては以下の項目を挙げることができる。

フィジーには地域主義的な特質があり、ことに西部地方は、国内において地域分権あるいは独立を志向する傾向が強い。本研究では、フィジー西部での調査を通じて、西部地方の独立志向の系譜と現在の状況についてあきらかにした。

都市部でも調査を行っており、そこでは、イタウケイ信託基金によるフィジー語という終焉化された原住民言語を活性化する動きについて、調査を行った。いわば、先住民の視点からの文化復興運動について知見を集めることで、都市部における先住民的なア

イデンティティの発露という意味で、紛争などの際に顕著に表れる先鋭化民族的アイデンティティの解明に役立つ資料でもある。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計７件）

①丹羽典生　2013　「＜紛争＞を考える――オセアニア現代への接近」，『現代オセアニアの〈紛争〉――脱植民地期以降のフィールドから」丹羽典生・石森大知（編）『現代オセアニアの〈紛争〉――脱植民地期以降のフィールドから』昭和堂、1-15 頁。

②丹羽典生　2013　「フィジーにおけるクーデタの連鎖」丹羽典生・石森大知（編）『現代オセアニアの〈紛争〉――脱植民地期以降のフィールドから』昭和堂、123-149 頁。

③丹羽典生　2012　「民族化する国家体制と離脱する人びと――フィジーのラミ運動からみる公共圏の形成」柄木田康之・須藤健一（編）『オセアニアと公共圏――フィールドワークからみた重層性』昭和堂、53-68 頁。

④丹羽典生　2012　「グローバル化と政治的不安定性――フィジー諸島共和国二〇〇六年クーデタ後の臨時政権の正当性をめぐる闘争を事例として」塩田光喜（編）『グローバル化とマネーの太平洋』アジア経済研究所調査研究報告書、67-86 頁。

⑤丹羽典生　2011　「婚姻実践を通じた土地所有権・用益権の獲得――フィジー諸島共和国ヴィティレヴ島西部のソロモン諸島民集落の事例を中心に」『国立民族学博物館研究報告』35 巻 4 号、 545-581 頁。

⑥ 丹羽典生　2010　‘Leaving their tradition behind: Development of the Lami movement in Fiji from 1949 to the 1990s’ *People and Culture in Oceania* 26 号、81-108 頁。

⑦丹羽典生　2010　「フィジー――多民族国家の中で」立川武蔵・安田喜憲監修、熊谷圭知・片山一道編『オセアニア』(朝倉世界地理講座 15) pp.290-301、東京：朝倉書店。

〔学会発表〕（計 16 件）

①丹羽典生　2013　「見えない民族間通婚――フィジーにおける先住系とインド系の「婚姻」の事例から」『人類学における家族研究の新たなる可能性』（代表者：小池誠）2 月 23 日　国立民族学博物館。

②丹羽典生　2013　「ヴァヌアツ移民に関する覚書――フィジーにおけるヴァヌアツ人集落の形成と現状」『科学研究費補助金「太平洋島嶼部におけるマイノリティと主流社会の共存に関する人類学的研究」研究会』2 月 18 日　京都大学品川オフィス。

③丹羽典生　2013　「グローバル化における紛争と宗教的社会運動」国際シンポジウム『グローバル化における紛争と宗教的社会運動――オセアニアにおける共生の技法』1 月 26 日　国立民族学博物館。

④丹羽典生　2013　「変革期と宗教的社会運動――先住民主体の経済開発思想への期待と変遷」国際シンポジウム『グローバル化における紛争と宗教的社会運動――オセアニアにおける共生の技法』1 月 26 日　国立民族学博物館。

⑤丹羽典生　2012　「アフリカ化論再考――オセアニアから紛争を考える比較の一視点として」『現代の紛争をめぐる地域間比較研究に向けて――アフリカとオセアニアの事例から考える』12 月 17 日　国立民族学博物館。

⑥丹羽典生　2012　「オセアニアの＜紛争＞に関する比較民族誌的研究――グローバル化の中での暴力・民族対立・介入」『オセアニアにおける独立期以降の＜紛争＞に関する比較民族誌的研究』11 月 17 日　国立民族学博物館。

⑦Niwa Norio　2012　‘Current Pacific Islands Studies in Japan and Germany: An Overview’, International Workshop, *IDENTIFYING NEW TOPICS IN FIJIAN STUDIES* 11 月 2 日　一橋大学。(with Dominik Schieder)

⑧ Niwa Norio　2012　‘Expanding the Ethnography of Social Anthropology Today: A Comparative Analysis of Marriage Practices Between Indigenous Fijians and Minorities in Fiji’, International Workshop, *IDENTIFYING NEW TOPICS IN FIJIAN STUDIES* 11 月 2 日　一橋大学。

⑨丹羽典生　2012　「社会人類学の可能性に向けた覚え書き――オナリ神研究に着目した社会的境界への比較の視点」『共同研究会「地域民族誌の方法論と人類学的空間構想

力の可能性の探求」』10 月 21 日　アジアアフリカ言語文化研究所本郷サテライト。

⑩丹羽典生　2012　'What is a Coup Culture?: Other Implication for Future Anthropological Research' 第 86 回現代人類学研究会、7 月 16 日　東京大学駒場キャンパス。

⑪丹羽典生　2012　「文化的同質化と民族アイデンティティ覚醒の動態――太平洋島嶼部の少数民族の坩堝から考える」『科学研究費補助金「太平洋島嶼部におけるマイノリティと主流社会の共存に関する人類学的研究」研究会』2 月 11 日　筑波大学。

⑫丹羽典生　2012　「コメント」『ケアと育みの人類学の射程』1 月 28 日　国立民族学博物館。

⑬丹羽典生　2012　「開発の進展とコミュニティ再編のインターフェイス――フィジーダク運動のリーダーのライフヒストリーからの考察」『福祉と開発の人類学：ひろがる包摂空間とライフコース』1 月 21 日　国立民族学博物館。

⑭丹羽典生　2011　「統合と分裂のはざま――フィジー西部地方の分離独立問題」『共同研究会「オセアニアにおける独立期以降の＜紛争＞に関する比較民族誌的研究」』12 月 17 日　国立民族学博物館。

⑮丹羽典生　2011　「コメント」『「日常」を構築する――アフリカにおける平和構築実践に学ぶ』3 月 6 日、国立民族学博物館。

⑯丹羽典生　2010　「マイクロ・ステイトにおけるグローバル化とガバナンス――フィジー2006 年クーデタ後の臨時政権の正統性をめぐる闘争を事例として」」『共同研究会「グローバル化における太平洋島嶼国家」』6 月 26 日、アジア経済研究所 。

〔図書〕（計１件）

①丹羽典生・石森大知　『現代オセアニアの〈紛争〉――脱植民地期以降のフィールドから』昭和堂

〔その他〕

○ホームページ

URL：
http://www.minpaku.ac.jp/staff/niwa/01.html#thema

○新聞掲載情報

「見出し」・新聞社名（朝刊/夕刊）・掲載日

①丹羽典生　2012　「鉄路叙景（7）　南洋の陸蒸気」・毎日新聞（夕刊）・12 月 13 日。

②丹羽典生　2012　「風を求めて（4）　いにしえの航海者たち」・毎日新聞（夕刊）・7 月 26 日。

③丹羽典生　2011　「オセアニア探検（3）熱帯で教会衣装をまとう」・毎日新聞（夕刊）・7 月 28 日。

④丹羽典生　2011　「くつろぐ（4）　午睡の楽しみ」・毎日新聞（夕刊）・2 月 23 日。

○その他

①Niwa Norio（ed）　2013　*Cargo Cults and Contemporary Conflicts in Pacific Societies: Seeking a Path of Coexistence in the Age of Globalization.* Osaka: National Museum of Ethnology.

②丹羽典生　2013　「フィジーの正月」『MAMOR』32 頁。

③丹羽典生　2012　「カーゴカルト」世界宗教百科事典編集委員会（編）『世界宗教百科事典』丸善出版

④丹羽典生　2012　「人肉用フォーク」みんぱく e-news138 号。

⑤丹羽典生　2012　「異聞逸聞　太平洋の島々における日本人移民の足跡」『月刊みんぱく』9 月号、20 頁。

⑥丹羽典生　2012　「時事性と民族誌、そしてメラネシア問題へのアプローチ」『民博通信』137、12-13 頁。

⑦丹羽典生　2012　「フィジー」『日本大百科全書（ニッポニカ）』小学館

⑧丹羽典生　2012　「首都の辺縁にて少数民族を考える」みんぱく e-news128 号。

⑨丹羽典生　2011　「身体に媒介されたエートスや暴力から＜紛争＞を捕える視点の可能性へ」『民博通信』134、14-15 頁。

⑩丹羽典生　2011　「鯨の歯の使い方」みんぱく e-news122 号。

⑪丹羽典生　2011　「オセアニアの教会衣装

集め始末記」『月刊みんぱく』7 月号、8 頁。

⑫丹羽典生　2010　「オセアニアの紛争研究事始め」『民博通信』131、22-23 頁。

⑬丹羽典生　2010　「リトル・インディアの行方――ギルミティヤからトランスナショナルなネットワークへ」吉岡政徳、石森大知（編）『南太平洋を知るための 58 章』東京：明石書店、94-98 頁。

⑭丹羽典生　2010　「サトウキビ産業盛衰史――基幹産業の過去・現在・未来」吉岡政徳、石森大知（編）『南太平洋を知るための 58 章』東京：明石書店、99-102 頁。

⑮丹羽典生　2010　「孤独な政治家の肖像――パシフィック・ウェイの提唱者ラトゥ・マラの生涯」吉岡政徳、石森大知（編）『南太平洋を知るための 58 章』東京:明石書店、103-106 頁。

６．研究組織

(1)研究代表者

丹羽　典生（NIWA NORIO）
国立民族学博物館・研究戦略センター・准教授
研究者番号：60510146

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし